医局だより

久留米大学外科学　乳腺内分泌外科部門
医局幹事　髙尾 優子

福岡県南西部に位置し、筑後川の恵みに育まれた自然豊かな久留米市に1928年に久留米大学は九州医学専門学校として創立されました。同時に付属病院で外科診療が開始となったといわれております。その後九州高等医学専門学校、久留米医科大学、久留米大学医学部と時代の流れとともに改称し1952年に外科学教室が創設し、乳腺・内分泌外科グループは1988年に独立し診療が始まりました。当時は乳腺疾患に対する関心が現在ほど高くはなく、独立した診療科としては珍しかったようです。以後臨床経験を蓄積し、2020年に初代教授として唐宇飛教授が就任し現在に至ります。現在大学病院は常勤医師が3名、大学院生2名の少人数で診療、研究、教育を行っております。また、関連病院も有しており周辺地域の乳癌診療にも携わっております。

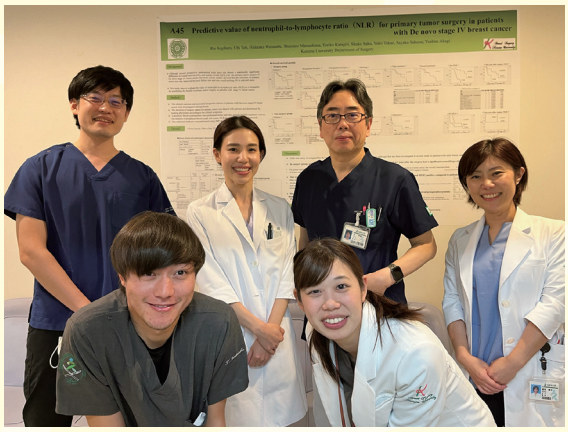
当医局は他施設の乳腺科と同様に多くの女性医師が所属しています。いかにライフワークバランスを保ちながら仕事ができる環境を作っていくかを試行錯誤しております。現在の乳癌診療において最新の知識と最新の診断技術、エビデンスに基づいた治療とフォローアップが求められ、つねに新しい診療知識を学びアップデートすることが必要不可欠なこととなっております。子育て中のメンバーもおり、家事や子育てなどの時間に対応するために夜にウェブカンファレンスや抄読会を施行し、みんなで情報共有をできるような工夫をしております。

また、子供の熱などで急に欠員が生じた際にはスタッフ同士でカバーしております。女性医師の復帰率は100％であり、それぞれが各施設で活躍をしております。

病院内においては病理部、放射線科、形成外科、遺伝外来などと定期的な合同カンファランスを行うことにより他診療科と積極的に連携し診療にあたっております。また、2020年より保険適応となりました遺伝性乳癌卵巣症候群(HBOC)乳癌において遺伝外来や婦人科と連携しBRCA1/2検査などの遺伝子カウンセリングやリスク低減乳房切除およびリスク低減卵管卵巣摘出術を施行しております。また、放射線治療センターと合同で陽子線治療による乳癌非切除臨床試験にも携わっております。さらに外来治療においては高齢の方や全身疾患を有する方も多い中、術前・術後療法、転移・再発治療など多岐に渡り、外来通院でも安全に行うことができるよう化学療法室などの体制を整えております。周辺の開業医の先生方とは定期的な交流会や、関連病院のスタッフが参加できるような研究会を開催しております。また、医療連携パスを作成し積極的に病診連携に取り組んでおります。

医局だより

乳癌手術においては色素法、ICG法、蛍光法を併用したセンチネルリンパ節生検を施行し手術時間の短縮や手術侵襲の軽減に努めております。また、乳頭乳輪温存皮下乳腺全摘術(NSM)や形成外科と共同で根治性と整容性に優れた手術を心掛けております。

教育においては乳腺診療に興味をもってもらえるよう臨床実習を中心に自主的に診療や手術に参加できる環境を整え、カンファランス論議や研究発表、学会への参加も積極に促しております。最近は乳腺科を志してくれている学生や初期研修医が徐々に増えてきておりますが、まだまだ人員が不足しております。今後さらに医局員一同当グループの発展および地域医療の貢献に努めていきたいと考えております。

今後とも変わらぬご支援賜りますようお願い申し上げます。